

第16回世界気管支会議に参加して 16th World Congress for Bronchology

梶原直央

Naohiro KAJIWARA

東京医科大学外科学第一講座

学 会：第16回世界気管支会議
(16th World Congress for Bronchology)
第16回世界気管食道科学会議
16th World Congress for Bronchoesophagology
開催場所：Budapest, Hungary
日 程：June 13-16, 2010

ブタペスト（ハンガリー）で行われた第16回世界気管支会議および世界気管食道科学会議に参加する機会を得たので報告致します。本会は4日間におよび開催され、大変エキサイティングでありかつ大きな刺激と貴重な経験を与えてくれました。また本

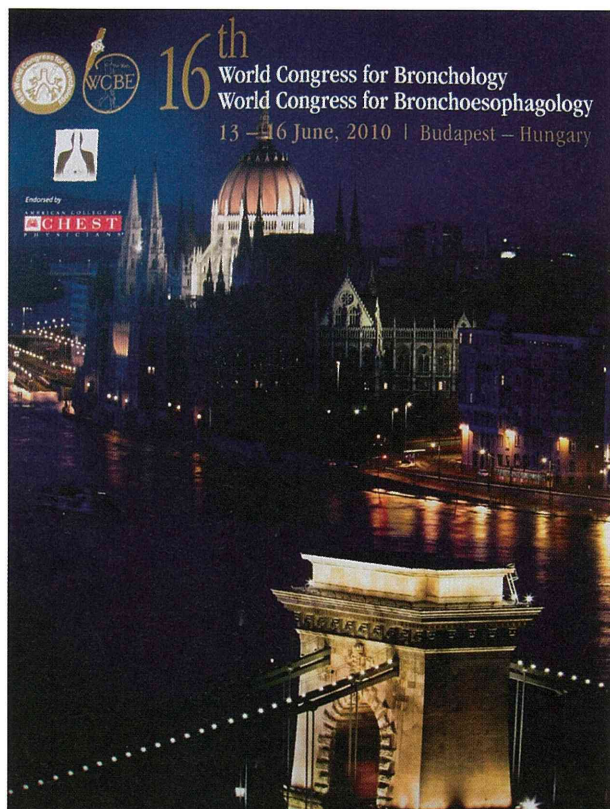
会のプログラムは、呼吸器および食道を学ぶ上で最適であると同時に、我々の目を世界に向けさせてくれるものでした。

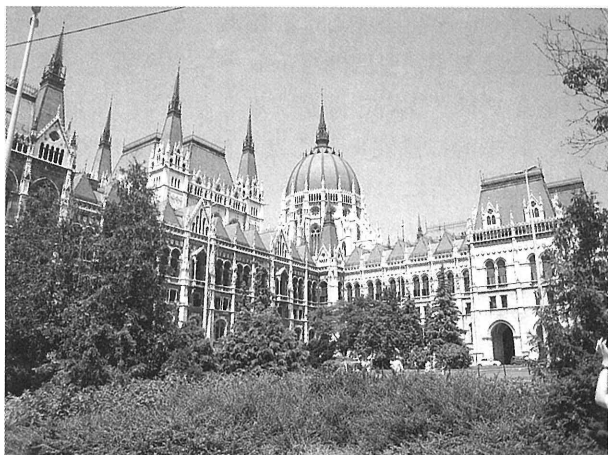
ハンガリー共和国は中央欧州における共和制国家です。西にオーストリア、スロベニア、北にスロバキア、東にウクライナ、南にセルビアなどの国家に囲まれており、東洋的な文化と西洋的な文化が交差する独特な雰囲気を持っており、『ドナウの真珠』と呼ばれています。国面積は、約9.3万平方キロメートルで日本の約4分の1となりますが、人口でみると約995万人となり日本の10分の1以下となります。

その歴史は1980年代末に冷戦終結の機運とともに共産党独裁の限界が明らかとなり、1989年に一党独裁を放棄の上、憲法を改正し民主化され今日に至っています。ハンガリーの首都はブダペストで、ドナウ川の両岸に広がる西側のブダとオーブダ、東側のペシュト（ペスト）の3地区からなる人口180万人程度の都市で、ロンドンの次に世界で2番目の地下鉄が開通した由緒ある都市です。

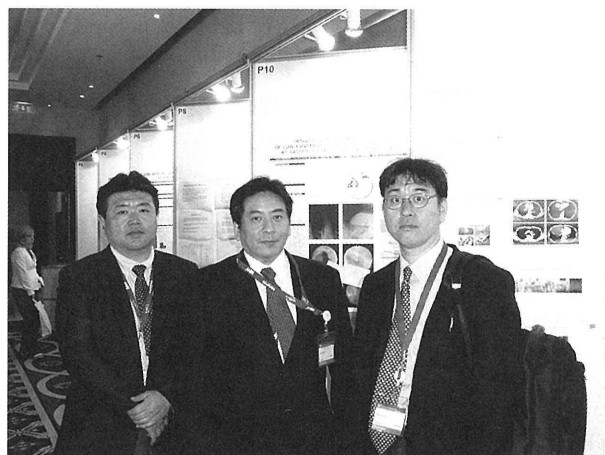
世界気管支会議は故池田茂人（元・国立がんセンター中央病院内視鏡部長）により1978年に設立された会であり、アジア、アメリカ、ヨーロッパ地域各国を巡回しながら2年毎に世界気管食道科学会議（国際気管食道科学会が前身）と同時に共催（1992年以降より）されています。広く世界中から著名な研究者が集い、気道と食道に関する全ての諸問題を討議するものです。近年、活動の場が診断から治療の分野に広がってきており、呼吸器および食道に関わる悪性および良性疾患を広範囲に渡り取り上げているのが大きな特徴の一つです。

本学会は当科と所縁が深く、前回の第15回東京





世界一美しい国会議事堂と讃えられているブダペスト国会議事堂



マリOTTホテルの学会場に於いて（右から内田講師、大平准教授および筆者）



建国1000年を記念して建てられた聖イシュトヴァーン教会内
学会初日にここでオープニング・セレモニーが開かれ、バッハ等のオルガンコンサートが催された

会議では多くの方々のご助力により東京医科大学が主催者として、無事に成功を収めることが出来ました。

そのような経緯から、今回の第16回ブダペスト会議では当科より10人が参加することになりました。主な日程とプログラム内容は、以下の通りでした。

6/13 正午から学会が開催され、EBUS（超音波気管支鏡）のSymposium、Hands-on Sessionの後、夜にはWelcome Receptionが行われました。

6/14 World Video Festivalが開かれ、Thematic Sessionにおいては“Training and competency in bronchology（気管支学の訓練と適応力）and interventional pulmonology（気管支鏡的治療）”が午前中に、午後は“Treatment of airway stenosis（気道狭窄の治療）”、

“100 years of thoracoscopy（胸腔鏡の100年）”、“Bronchoscopy in the newborn（新生児の気管支鏡）：airway stenosis and stenting in infants”等のテーマに関して討論されました。もっとも感動的で印象深い夜となったOpening Ceremonyは、聖イシュトヴァーン教会内で厳かに行われ、バッハ等のオルガンコンサートが催され幻想的な気分に入ることができました。

6/15 午前中はVideo Theater、Meet the professorでは“EBUS from experiments to every day practice（日常の臨床からの超音波気管支鏡の経験）”、“Expiratory central airway collapse（中枢気道の虚脱）”、“Emergency thoracic ultrasonography（緊急時の胸腔内超音波）”などをメインテーマに、Honorary Lectureでは“Sentinel lymph node navigation surgery（センチネルリンパ節ナビゲーション手術）”、“Interventional Pulmonology Before and After the Stents（ステント治療前後での気管支鏡的治療）”、“Diagnosis and Staging of Lung cancer（肺癌の診断と病期決定）”の公演が行われました。午後にはThematic Sessionとして“Bronchoscopy in the World（世界の気管支鏡）”と題された世界中（UK・America・France・Japan・Hungary）の様々な気管支鏡における知見を学ぶことができ、“Autofluorescence—The New Generation（蛍光内視鏡—新世代）”等、最先端の話題が討議されました。

6/16 最終日のMeet the Professorでは“Early Detection（早期発見）”を中心に、Honorary Lectureでは“Role of Pediatric Flexible Bronchoscopy in 2010（2010年での小児における軟性気管支鏡の役割）”と題して活発な演題が討議されました。

我々は今回の学会に、気管支鏡技術の世界最先端技術に触れたいとの思いで参加しました。その中でもEBUS（超音波気管支鏡）技術の確立、3D技術を駆使したVirtual Reality（仮想現実）の進歩には目を見張るべきものがありました。

現在の気管支鏡技術では3D-CT等の併用操作による立体画像の構築が容易であるため、呼吸器領域における疾患の診断は今まで以上に詳細かつ正確に行うことができ、よりの確で侵襲の低い治療も可能とされています。これまでの2次元的な問題点は、VR技術を駆使することで病態を多面的に把握し、今後さらなる技術の進化に伴って発展してゆくと思われれます。診断技術の発展に伴い、Intervention技術の向上や最新のデバイスの開発（特に日本製）には、本会を通じて気管支学における日本のレベルの高さを再認識することが出来ました。

本邦における当分野の将来に希望することは、気管支鏡などの最先端技術を一個人の技で終わりとせず、いかに若い医師達に技術を伝え、継承し、発展

させて行くかを克服することにあると考えます。そのためにはまず、専門的なトレーニング施設・全国統一的なプログラムを確立することが早急な課題であり、将来的に意義あることと痛切に感じました。実際今回の学会においては、これまで以上に専門医によるハンズオンや技術的なセッションが増えてきたように思いました。最新医療機器やそれらを使いこなす技術に、格差のない医療が実践できるように様々な工夫と試みが世界規模で行われていることを、直接肌身に感じる事ができたのは、非常に大きな収穫となりました。本会のような世界規模の学会は、海外での研究や発表等を考えている方々のみではなく、広く臨床や教育に関しても意欲のある先生方には是非参加して頂きたい学会のひとつであると思います。

最後に、今回のような貴重な機会を与えて下さいました東京医科大学関係各位の方々に、紙面をお借りして心よりの感謝を述べさせて頂きたいと思いません。